

招待席

上田 敏

うえだ びん 詩人 1874 - 1916 東京に生まれる。
明治二十八年(1895)「帝国文学」創刊にわり海外文学の
紹介に努め、明治三十八年(1905)刊の訳詩集『海潮音』
(本郷書院)はイタリア、イギリス、ドイツ、プロヴァンス、
フランスの詩をあつめ、ことにフランス象徴詩の紹介は後
進に新鮮かつ多大の感化を与えた。掲載作はその抄出。

海潮音 抄

薄暮の曲 シャルル・ボドレエル

時こそ今は水枝(みづえ)さす、こぬれに花の顫ふころ、
花は薫(くん)じて追風(おひかぜ)に、不断の香(かう)の爐に似たり。
匂も音も夕空に、とうとうたたり、とうたたり、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦(う)みたる眩暈(くるめき)よ。

花は薫じて追風に、不断の香(かう)の爐(ろ)に似たり。
痠(きづ)に悩める胸もどき、[♯]オロン楽(がく)の清搔(すががき)や、
ワルツの舞の哀れさよ、疲れ倦みたる眩暈(くるめき)よ、
御輿(みこし)の臺をさながらの雲悲みて艶(えん)だちぬ。

何の苦もなく、牧草(ぼくさう)を食(は)み、身に生ひたる
羊毛のほかに、その刻(とき)来ぬれば、命をだに
惜まずして、主(しゆ)に奉る如くわれもなさむ。

また魚とならば、御子(みこ)の頭字(かしらじ)象(かたど)りもし、
驢馬ともなりては、主を乗せまつりし昔思ひ、
はた、わが肉より襠(はら)ひ給ひし豕(みのこ)を見いづ。

げに末つ世の反抗表裏の日にありては
人間よりも、畜生の身ぞ信深くて
心素直(すなほ)にも忍辱(にんにく)の道守るならむ。

落葉(らくえふ) ポオル・ゴ`ルレエヌ

秋の日の
ヰ`オロンの
ためいきの
身にしみて
ひたぶるに
うら悲し。

鐘のおとに
胸ふたぎ
色かへて
涙ぐむ
過ぎし日の
おもひでや。

げにわれは
うらぶれて
こゝかしこ
さだめなく
とび散らふ
落葉(おちば)かな。

嗟嘆(といき) ステフアンヌ・マラルメ

静かなるわが妹(いもと)、君見れば、想(おもひ)すゞろぐ。
朽葉色(くちばいろ)に晩秋(おそあき)の夢深き君が額(ひたひ)に、
天人の瞳(ひとみ)なす空色の君がまなこに、

憧るゝわが胸は、苔古りし花苑(はなぞの)の奥、
淡白(あはじろ)き吹上(ふきあげ)の水のごと、空へ走りぬ。

その空は時雨月(しぐれづき)、清らなる色に曇りて、
時節(をりふし)のきはみなき鬱憂は池に映(うつ)ろひ
落葉(らくえふ)の薄黄(うすぎ)なる憂悶(わづらひ)を風の散らせば、
いざよひの池水(いけみづ)に、いと冷(ひ)やき綾は乱れて、
ながながし梶子(くちなし)の光さす入日(いりひ)たゆたふ。